

## 令和7年度 第1回沼津市総合教育会議 議事録

- 開催日時 令和7年5月30日（金曜日）14時00分～15時58分
- 開催場所 沼津市水道部庁舎3階会議室
- 出席者 市長 頼重 秀一  
教育長 奥村 篤  
教育委員 佐藤 清子  
教育委員 土屋 葉子  
教育委員 川口 浩史  
教育委員 重光 純

- 協議・調整事項  
次期沼津市教育大綱の策定に向けて

### 【内容】

#### 1 開会

#### 2 市長挨拶

本日は、令和7年度の第1回沼津市総合教育会議に、奥村教育長をはじめ教育委員の皆様方には御多忙の中にも関わらず、ご足労賜り厚く御礼申し上げます。また、市民の皆様、教育関係者、議会関係者、マスメディアの皆様方におかれましても御出席賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

本日開催する総合教育会議は、市長が開催するものであり、市長と教育委員会が協議・調整を行い、本市の教育に係る様々な課題を共有し、連携して教育行政に取り組むため開催するものである。今年度第1回目となる本日の会議では、「次期沼津市教育大綱」の策定をテーマに、教育長と教育委員の皆様と、様々な視点から活発な意見交換をしたいと考えている。

「教育大綱」とは、各地域の実情に応じて、教育、芸術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定めるものである。現在の本市教育大綱では、「誇り高い沼津を創造する 貴き志を持つ人づくり」を掲げ、推進を図ってきたが、今後の時代の移り変わりやこれからの社会に必要なものを反映させて策定を進めていく。

これまでの5年間を振り返り、そして、これからの5年間を見据えて、沼津市がどう変わっていくのかを想像しながら、新たな教育大綱の策定について考えていきたいと思う。よりよき総合教育会議になるようお願い申し上げます。

#### 3 教育長挨拶

本日、傍聴席には議員の皆様、教育関係者をはじめ、多くの市民の皆様にお集まりい

ただき感謝申し上げます。また、頼重市長には総合教育会議を開催していただき、教育委員会を代表し御礼申し上げます。

本日の総合教育会議では、本市の教育や行政の根幹をなす、「次期沼津市教育大綱」の策定に向けた話し合いと聞いている。社会や国の変化によって、教育現場でも早急な対処が求められ、その変化は年々、急になっているように感じている。

教育に関しては、次期学習指導要領の改訂に向け、昨年12月には中央教育審議会の答申が示された。その中で、子供たちを取り巻くこれからの社会の状況を「不確実性の高まり」と表現し、少子化、高齢化、グローバル情勢の混迷、生成AI等デジタル技術の発展といった、激しい変化が止まることのない時代を、今の子供たちは生きることになる、といったことが挙げられていた。不確実性が高まっている世の中だからこそ、自分の力で未来を切り開く力が子供たちに求められ、そして、子供を支える我々大人たちにもその力が求められている。

政治や経済による変化はもちろん、気候変動や環境の変化、そこから起こる暮らしの変化は、各家庭や地域、学校にも影響を与え、そして、教育を受ける子供たちにも大きな影響を与える。変化の激しい社会だからこそ、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」を大切に、同時に「時代の変化とともに変えていく必要があるもの」に、柔軟に、そして迅速に対応していかなければならないと考える。

これからの社会を切り開く本市の子供たちが、笑顔を絶やさず、自分らしく生きていく社会をつくるためにも、このようなことを踏まえた「教育大綱」に掲げる理念は、とても重要なものになってくる。本日の会議が、様々な視点やそれぞれの立場から意見を交わし、「貴き志を持つ人づくり」を目指す本市の教育のさらなる発展に向け、有意義な会議となることを期待する。

#### (出席者紹介)

#### 4 協議事項

次期沼津市教育大綱の策定に向けて

会議の進行は、沼津市総合教育会議設置要綱に基づき、座長である市長が行う。

(市長)

本日の議題、「次期沼津市教育大綱の策定について」協議・意見交換を行いたい。  
意見交換を行う前に、事務局から説明をお願いする。

(事務局)

次期沼津市教育大綱の策定に向けた内容について説明。

(市長)

事務局からの説明にもあったように、現行の沼津市教育大綱が今年度で終期を迎え、来年度から新しい教育大綱が始まる。次期沼津市教育大綱の策定については、前回の総合教育会議で皆様から御意見があったように、改訂するに当たって、骨子

は変えず、5年後の社会を見据えて必要とされる事項を教育大綱に盛り込んでいく、ということを確認した。その中で、次期沼津市教育大綱に盛り込む要素として、三つの要素が事務局から提示された。一つ目が「探究心の更なる必要性」、二つ目が「誰一人取り残さない社会の構築」、三つ目が「ウェルビーイングの向上」である。

この三つの要素を中心に、皆様のお考え、思うところをお聞かせいただきたいがいかがか。

(委員)

盛りだくさんというのが、正直な感想である。いずれも大切な要素であり、どれも欠けることは難しいという気がした。特に、「探究心の更なる必要性」は、教育DX、情報教育の推進、情報リテラシーの必要性、地域や国を愛し誇りを高める環境づくり、生涯学習の整備と充実、文化芸術の振興など、これだけの内容があるのか、この言葉でこれらの要素は全部思いつくのか、大丈夫なのかと思った。

ただやはり、地域とか社会、特に最近は多文化共生というものがあるが、日本とか沼津といった地域に関する愛情がなければ、自己肯定感も育まれない。育まれないという言い過ぎかもしれないが、やはり郷土を愛する心というのは、自分の育った地域への愛着や自己肯定感の育成に結びつくと思うので、重要なことだと思う。

私自身も子供たちに対して、どういった人間になってもらいたいのか、その要素としてどういった教育をしていくのがよいのかと考えている。今後の社会には、おそらく様々な国の人たちも入ってくるかもしれないし、日本人が外国へ行くことも多くなるかもしれない。その中で、地に足をつけて、どこでもたくましく生きていける人間になって欲しいと思う。また、日本の文化や沼津の歴史など、そういう自分の育ったところに関する理解や誇りを育むというのは大事だと思っている。

非常に大事にしなくてはならない要素があればこれもあるため、どれもこれも盛り込もうとすると、わかりづらくなってしまいうのが難しいところだという印象を受けた。

(市長)

貴重な御指摘をいただき、御礼申し上げます。確かにどれもこれもとなると、一つ一つの内容が薄いものになってしまう可能性がある。ただ、時代の潮流や世相を反映するなど、様々なものに対応しなければならない部分があるのも事実である。そのことに関しては、いろいろ議論を重ねさせていきながら、より精度の高い、わかりやすいものになっていけばよいと考えている。

また、掘って立つ部分ということに関しては、それぞれのアイデンティティが求められる、そういう時代なのかと捉えている。個々のアイデンティティに関しては、日本では日本人というアイデンティティの概念が、諸外国と比べると薄いのではとよく言われる。やはり、自分を育てた環境であったり、郷土であったり、地元への愛着心や郷土に対する思い、これらを育てていくこともアイデンティティの醸成として大切であり、個の形成にしっかり結びついていくと思った。

(委員)

教育基本構想が令和3年度に始まり、国の教育振興基本計画が令和5年度に始まった。その間に社会では何があったのかというと、コロナ禍があり、様々な社会変動があった。国の教育振興基本計画を見ると、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」があり、ここが今回強調されている気がする。

「日本社会に根差したウェルビーイング」について、「ウェルビーイング」、言い換えれば「幸せ感」というのは何からくるのか。身体的なことに関しては、日本人は世界的にみても健康的で病気が少なく、非常に良い状態と言える。また、精神的な面については、心身の調和のとれた、ストレスや不安の少ない状態であるが、ある調査によると、日本人は「幸せ感」を感じているのが、30か国中、下から数えた方が早い27位であり、自分たちは幸せではないという意識があることを表している。

それは一つには、良好な人間関係ができていないこともあるのではないかと。良好な人間関係というのは社会性もあるが、心の問題が大きな要因の一つであると思う。一番身近な家族や身近な人々との良好な関係が築けていないと、幸福感が低くなってしまう。これはとても重要なことであると思う。

教育の中で、子供たちや教職員の中で、「幸せ感」を高めるにはどうしたらいいかということ、心の問題を今まで以上に重視していく。具体的にどう進めていくのかは試行錯誤があると思うし、また、今回の教育基本構想の中では、具体的などころまではいかなくてもいいと思うが、「幸せ感」をどうしたら向上させることができるのか、それがとても大事なことであると思う。ウェルビーイングの達成が、誰一人取り残さない社会にも繋がっていくと思っている。

(市長)

健康面のことに関しては、静岡県は健康寿命が全国でもトップクラスと言われており、我が国においてトップクラスということは、世界ではNo.1と言っても過言ではないということである。しかしながら、「幸せ感」の御指摘については、これは私も大変危惧しているところであり、心身というのはやはり一体的なものであって、体は健康だが心は病んでいる。これでは本当に健康的な生活とは言い難い。そういう意味で、学校教育の場での心のケアや心の持ち方、また人との触れ合いの中における心の醸成などは、重要な場面であると思う。

また、学校教育の中だけでなく、最近は地域と学校と保護者が三位一体となって、いろんな取組を行っている。さらに、各企業や諸団体と連携しながらという流れもある。心の涵養や醸成を行い、心身ともに健全な地域の未来を担う人材を育成していく、それが大変重要と捉えた。

(委員)

教育大綱と教育基本構想を読み返して感じたことは、教育というのは多岐にわ

たっている。一つだけ取り上げてどうこうという訳ではなく、いろんなことが関係していると思った。教育に関わる対象でいうと、幼児から高齢者まで幅広く、それから心・体・知識といった分野、そして市役所の業務で言ったら本当に多くの部署に関わってくるものだと改めて思った。

先程、三つの要素を示していただいたが、どれが一番という訳でもなく、どれが一番大切という訳でもない。どれも一番で、みんな大切であると、三つの要素を示されて思った。

5月14日の新聞記事に、ユニセフの子供の幸福度の調査報告が掲載されていたが、日本は身体的な健康度は首位だが、精神的な健康度は43か国中32位だった。2020年の調査では37位だったそうである。スキルに関しては、2020年は14位だったのが12位で、総合的には2020年は20位だったのが14位だった。この結果を受けて、林官房長官が、全ての子供や若者が安心して過ごせる居場所づくりを推進する、ということを発表したそうで、全てが繋がっているというのが、その記事を読んだ感想だった。

自己肯定感が今の若者は低いというお話もあったが、自己肯定感は低いかもしれないが、自己顕示欲はすごく強くなっているように私は感じた。

(市長)

具体的な事例を御提示いただき、数字を示されると、なおさら説得力があった。日本は、健康面やスキルにおいては世界的に見ても上位にもかかわらず、精神面の部分では低い順位である。これが、今の日本の子供たちが抱えている様々な課題等を、ある意味で象徴していると思った。

今のこの状況が続いていくことが、日本の未来に大きく影響してくると思う。精神の部分、心の部分については、薬でどうこうなるものではないため、より重大な深刻なこととして取り組んでいかなくてはいけない、そういう時代になったと捉えた。

また、様々な分野に関わってくるため、教育委員会だけでなく、市長部局も連携していくことの大切さを御指摘いただいたが、この総合教育会議では私も意見を述べさせていただける場であるため、そういう意味で非常に重要な会議と捉えている。どんどん御意見等を出していただいて、よりよい会議にしていきたいと思う。

(委員)

探究心について、そもそも探究するということは、何かに興味があるからこそ探究するのであって、興味がなければその気持ちも起こらない。つまり、探究するためには、何かに興味を持つこと、興味を持てることに出会えること、見つけたりすること、これが必要なのではないか。子供たちにはできればたくさんの「何か」に出会う機会をもってほしいと常々思っており、何かに出会える環境を整えていくことが、私たち大人に求められていることだと思う。

また、先程から皆さんもおっしゃっている「ウェルビーイング」であるが、教育大綱に盛り込むウェルビーイングについて、誰にとつての「ウェルビーイングの向

上」なのかと考えると、それは子供たちの、教育を受ける側の子供たちのウェルビーイングの向上だと思う。子供たちに対する教育活動が上手くいき、子供たちも学んでいる、育っているということが実感できると、おそらく保護者や先生方のウェルビーイングも一緒に向上していくのではないかと考えている。

一方で、以前の総合教育会議の中でも発言したかもしれないが、このような未来のことやこれからの教育などに関する資料を読んでいると、あまりにも子供たちにいろいろなことを求めすぎているのではないかと、少し不安に思うことがある。大人でもこんなにできないのではないかと、いろいろなことを子供たちには求めている、それを子供たちの中にはプレッシャーに感じてしまったり、疲れてしまったりしている子もいるのではないかと考えた。

そんな時代だからこそ、子供たちが自分自身を守るような力も必要だと思うし、その力を支える社会の仕組みや子供たちを守る仕組みが必要だと感じた。

#### (市長)

大人である我々が、親の立場、教員の立場、地域住民の立場と、それぞれの立場から未来を担う子供たちのために、様々なことに取り組んでいる。特に沼津市の場合、昭和55年から青少年健全育成都市宣言をして地域の子供は地域で育てると、地域ぐるみでサポートしながらやってきたが、委員の御指摘のように、あまりにも子供たちに求めすぎてしまうと、そのことがプレッシャーを与えることになってしまう。また、子供たちも求められることに慣れてしまう。これは気をつけなくてはならないし、非常に重要なことと捉えさせていただいた。

良いことであっても、相手が理解をして納得して初めてその人のものになるわけで、過度に与えすぎる、求めすぎるのは、精神的にもいろんな負担をかける可能性もあることだと感じた。重要な御指摘をいただき感謝申し上げます。

#### (教育長)

委員のおっしゃるとおりで、昨年末の中央教育審議会の初等中等教育の答申では、顕在化している課題の中に「主体的に学びに向かうことができている子供の存在」というのがクローズアップされていた。学ぶ意義を十分に見出せずに、主体的に学びに向かうことができている子供というのが、実は増えている。静岡県でも全国でも、不登校児童生徒の増加が問題となっており、小中学生の不登校の理由の一つに「無気力」が挙げられている。主体的に学ぶことについていけず、諦めてしまっている子供たちもおり、それが「無気力」に繋がっているのではないかとされている。

このような子供たちを見守ることが、「誰一人取り残さない社会」を目指す本市の教育大綱の特色の一つになると思う。ヘルプを出せる、困っていたら困っていると表明できる、そのような環境をつくっていくことも大切だと思う。

最近、「伴走」とか「包摂」という言葉を目にする。学校現場では、「誰一人取り残すことなく学ばせたい」と日々工夫や挑戦している先生方がたくさんいる。一丸となって取り組んでいる学校もたくさんある。そして、そのような先生たちのこと

を子供たちはよく見ている。それを支援する体制が大切である。

これまでの5年間、新型コロナウイルスの流行を経て、人々のライフスタイルや価値観は変化した。また、教育を取り巻く環境も大きく変わり、課題が山積している。いじめ、不登校児童生徒数の増加や、部活動の地域展開、文化財の保存・活用の促進など、様々な分野での対応が必要となっている。とりわけ GIGA スクール構想による子供たちへの一人一台端末の貸与や、生成 AI の目覚ましい発展は、教育分野に大きな影響を与えている。

人間の創造力が形成される上で、小学校、中学校、高校の時代はとても重要な時期である。教育現場で、デジタル技術や生成 AI と上手く付き合っていくことは重要であるが、そのためにはまだまだ検討しなければいけないことがたくさんある。デジタル技術というのは、子供たちが指示を受けるための道具ではなく、自ら探究し、挑戦し、表現する場を提供するものだと思う。

「不易と流行」という言葉がよくいわれるが、VUCA の時代、ICT 技術や生成 AI が社会のあり方を変えようとしている今、これまでの学校教育の「当たり前」も見直される時期にきていると考える。教育委員の皆さんがおっしゃったように、子供たちには探究心や貴き志を持ち、自ら考え判断し、行動する、挑戦する力を身につけさせたい。そのためにも安全・安心で学びを保障する教育環境の整備が大切となる。

また、教育委員会としては、学校教育だけではなく、生涯教育の視点に立って幼い子供からお年寄りまでの学びの充実が求められる。郷土に誇りを持ち、生きがいや思いやりに満ちた、誰もが学び続けられ、活躍できる沼津市の実現を目指したい。

本市の次期教育大綱の期間となる令和 8 年度から令和 12 年度は、学習指導要領改訂の時期と重なる。世の中の情勢や時代の潮流に合わせて求められるものを受け止め、国や県の教育振興基本計画を踏まえて、教育大綱を定めていく必要がある。本市においては、令和 8 年度に小学校 3 校が 1 校に再編され、令和 9 年度には中学校 2 校が 1 校に再編される。また、一人一台端末の更新時期を迎え、情報活用能力の育成がこれまで以上に求められる。令和 10 年度の夏以降は、中学校の休日部活動が地域展開となる。このように、これからの 5 年間にはいろいろなことが変わっていく。これらを踏まえて、教育大綱にどう織り込むのが大事ではないかと思っている。

(市長)

教育長からも御指摘があったように、特にここ数年、教育現場では多くのことが変わった。コロナ禍を体験して人と人との接触自体が否定されるような期間があり、生活習慣も経済活動もそれまでの生活も変わってしまったことは事実である。学校教育のあり方だけではなく、お話にあったような生成 AI やデジタル化、自治体でも DX (デジタルトランスフォーメーション) による取組が求められている。このような状況、時代の潮流において、対応していかななくてはいけない時代になった。そういう意味において、過去から未来へ向かう非常に大事な過渡期に、今後の 5 年間があると思う。

今の状況をしっかりと把握し、ある程度の未来を予測しながら、本市の次期教育

大綱をつくっていかねばいけないという責務が、今我々に求められていると思う。皆様方からの貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。

探究心について、各委員からもいろいろお話が出たところであり、スライド説明においても非常に重要なポイントであると取り上げられていた。その中で、文化芸術の振興も取り上げられており、探究心と文化芸術の振興は非常に大きく関わる内容であると思う。趣味や生活の中で文化や芸術に関わる場面があると思うが、ある意味で自分自身の教養を高めることになり、教養が整うことによって、自分を肯定したり、自分の存在意義にも繋がり、結果として自分自身の「ウェルビーイングの向上」に繋がると思う。

また沼津は、文化芸術だけではなく、スポーツを活用したまちづくりも進めてきた。令和5年3月には、新総合体育館がオープンし、まさにスポーツの殿堂ができた訳であるが、こちらではバレーボール、バスケットボール、フェンシングや大相撲等、様々なプロの方々にお越しいただき、プロの技を観戦していただく取り組みも行ってきたところである。

そのような中において、本市は今、フェンシングのまちを推進している。パリ五輪の御記憶があると思うが、パリ五輪に参加するフェンシングの日本代表選手が、直前の強化合宿を沼津市内で開催し、五輪では見事に五つのメダルを獲得する快挙を成し遂げた。また最近では、フェンシングの裾野が広がり、若い世代の競技従事者が育ってきており、全国大会はもちろん、国際大会にも出場する選手も生まれ始めている。

また、このフェンシングだけではなく、沼津市内においては多くの競技団体が所属する沼津市スポーツ協会があり、こちらに所属している小・中・高校生の中にも全国大会や世界大会でどんどん活躍している人たちが生まれてきており、人材を育成する環境づくりができていると捉えている。教育の分野においては、知育・徳育・体育があるが、この「体育」の部分においては、この5年間の中で沼津市の取り組みは、効果を発揮することができたと思う。

今後の5年間においては、スポーツだけではなく、文化芸術の殿堂である市民文化センターの大規模改修が始まり、地域の方々だけではなく多くの方々に求められている文化芸術の殿堂について、教育委員会としっかりと連携をとりながら、精度を上げて整備を進めている状況であり、このような取り組みも本市の文化芸術の向上に繋がってくると考える。

また、沼津市には文化芸術を向上させる「土壌」がある。その土壌とは一体何かというと、沼津市は豊かな自然環境に恵まれ、風光明媚な景観があり、気候も温暖で、そして美味しい食材も豊富な土地柄であり、明治時代には「海の軽井沢」とも言われ、皇族をはじめ政治家や経済界の方々が競って別荘を建てた。こういうこともやはり、本市の文化芸術醸成の一つの要因であると思う。また、このような風光明媚な場所であるので、実に多くの文人墨客がこの沼津に居を構え、創作活動を展開しており、そういう土地柄である。

そういう意味において、沼津市には文化芸術の土壌があり、優れた環境がある。これからも、皆様方のお力添えをいただきながら「文化芸術の薫るまち沼津」の実

現に向かって取り組んでいき、これが将来の本市を支える大切な人材である子供たちのためにも繋がると思っている。

皆様方の御意見をいただいた中で、この三つの要素が次期沼津市教育大綱に盛り込むべき必要な要素、視点であることを後押ししていただけたように思う。

(市長)

それでは、二つ目の協議・意見交換となるが、一方で、教育は普遍的なものであり、時代や社会が変化する中でも変わらないものや、不易の部分や変えてはいけない部分もあると考える。その他にも、これからの社会変化の中で、さらに重要視されてくるものもある。このことについて、皆様方の方からの御意見をぜひお伺いしたい。

(委員)

平成 20 年に中央教育審議会の答申を調べる機会があり、その中で「生きる力を育む」というのがあった。生きる力を育むとはどういうことなのか、と考えた結果、自分の命は自分で守るということだと気づいた。それと同時に「他を守る」ことでもある。漢字では「他」と書くが、これは人に限定された「他」ではなくて、自然であるとか、あらゆる命とか多くの意味がある幅広い意味での「他を守る」ということではないかと思いついた。

教育大綱の中で、「人間力」という言葉を聞いたときに、「生きる力を育む」とニアリーイコールだと思った。人間力というのを、そのとき私は初めて知ったが、「他を守る」ということは、そのために人の意見を聞くし、他の人を受け入れる、思いやりを持つことになる。今までの会議の中でも、心という話が出てきたが、これもやはり心を育むというところに繋がっていると思うし、心を大切にすることは、とても重要なことである。

そして、幼児には遊びが大切だと思う。その遊びを通して、ルールであるとか、他を受け入れる、順番を守る、我慢すると、いろんな要素が遊びの中で体験できる。これがベースになって成長していき、次の段階に進んでいくと思う。また、五感を育てる教育について、五感を大切にすることも幼児にはとても重要で、それにはやはり体験することが大切なのではないかと思う。

(市長)

命を守る、命の大切さを学ぶことは、自分だけでなく、他の観点も持つ、他も大切にするというお話はその通りであり、とても大事なことである。仏教用語になるが「利他の心」という言葉があり、これは自分ではなく他人を助けるという意味である。沼津市は、白隠禅師のふるさとであり、そういう精神面における学びの場であったり、先程、体験の重要性という話もあったが、様々な体験をする場所があり、自然環境も他に自慢できるような優れた場所である。

心や精神の調整においても、文化的なものだけではなく、自然環境やそれを育む環境が整っていること、それらを大切にしていかななくてはいけないと考えさせられ

た。

(委員)

先程も話にあがっていたが、学校に行けない子供が増えており、学校に行くことはできても、授業中に教室で座っていられなかったり、他の子供たちと上手くやれなかったりする子供たちがいる。自分は学校に行けない、何で行けないのかわからない、そんな悩みや問題を抱えている子供もいるのではないかと思う。

これはあくまで個人的な意見であるが、これまでのように学校という仕組みだけでは子供たちの教育を進めていくことが、もう無理なのではないかと、そこまできているのではないかと思う。価値観の多様化とか社会の変化のスピードも早すぎて、教育委員会とか学校だけではもう追いつかないと感じている。行政機関はもちろんであるが、民間企業や地域の方々など、いろんな関係機関と連携してやっていかないと、どうなってしまうのか、すごく不安に思っている。

先程、委員のお話にも「体験の大切さ」があったので、一つの実例としてお話をさせていただくが、私が勤めている施設の職員にも、特別な支援が必要な子供を持つ職員がいる。学校では授業中に支援員さんがその子に必ず付いて、それでも教室を出ていってしまったり、自宅に帰った時にも大きな声を上げてしまったり、四六時中動き回ったりして、どうしようもない。困ってしまって、このままどうやって育てていったらいいのかと、その職員はすごく悩んでいた。特に、長期の学校の休みがあったときには、その子を見る人がいないので、施設に連れてきてもよいかという話があった。だったら、施設でボランティアとして手伝ってもらったらと受け入れをした。

その子は当時小学校1年生で、今は施設に来て一年くらいになるが、すごくかわいらしい子で、御入所されている方も声をかけてかまってくれる。施設では、そんなに難しいことでなければ、その子に何でもやってもらっているし、その度に利用者さんや職員から、その子は「ありがとう」と感謝される。回数を重ねるごとに慣れていって、施設に来ることが本人の楽しみになっていると聞いて、こちらも嬉しくなった。

親である職員に話を聞くと、その子は施設で一緒にお手伝いをする、家に帰ると良く眠ってくれる。施設に来る前は、些細なことでもその子を注意したり怒ったりしていて、親として褒めてあげたりしたいけれど、全然余裕がなかった。けれども、その子を施設に連れて来るようになってからは、気持ちに余裕が生まれたという話もあった。

何らかの特別な支援が必要な子供たちが増えているという中で、子供も大変だが親御さんもかなり御苦労されていると思う。今、その子は学校が休みの日で、その職員が仕事の日には必ず来るようになり、その子にとっては施設に来ると、褒められたり、ありがとうって言われたりするから、おそらく居心地が良いのだと思う。

私が勤める施設は、たまたま福祉施設でお元気な方が多くいるから受け入れることができたということもあるし、福祉施設だからといって、どこでも同じようなことができるわけではない。一般の会社でも、何か考えていくことで、できること、

できないことも当然あると思うので、全てにこのような対応が当てはまるとは思っていない。ただ、何かできることがあるかもしれないということ、頭の隅に置いている人たちが増えてくると、インフォーマルな居場所みたいな、場所とも言えないかもしれないが、今までなかったようなものが、何か自然発生的に地域の中でできてくるとよいと思った。

教育は、学校だけで完結できるものではないし、家庭とか地域だけでも駄目だと思う。先程の職員の子供も、施設に来て利用者さんや職員からいろんなことを学んでいると思うが、多分、職員や利用者さんもその子からいろんなことを学んだり、もらったりしているのではないかと思う。教育は、一方的なものではなくて、双方で育んでいくものだと思う。それが学校教育だけではなく、生涯学習の話も出ていたが、子供も大人も誰もが学び続けたり、学び直せたり、何かそんなことができるような仕組みが、地域の中でできていくと良いと思う。

#### (市長)

教育というのは一方的なものではないというお話があったが、親としての立場で私も子供から学ぶことはたくさんあった。自分の子供のときはどうだったかと振り返ると、親の自分が全て正しいわけではないということ、自分の子供や他の子供たち、スポーツ少年団の活動を通じて多くの方々と接する中で学ばせていただいた経験があるため、すごく共感をした。

また、オフィシャルでなくてもという話もあったが、いろんな方々に関わっていただくことは、すごく大事なことだと思う。幸いにも沼津市には「子供の居場所」づくりについて、本当に多くの団体の皆様方に御協力をいただいている。例えば、こども食堂の運営であったり、子供の居場所がない場合にはその場所を提供し、話を聞いたり、読み聞かせをするなど、子供たちが選べるような環境づくりをそれぞれの地域で立ち上げており、ありがたい環境ができていると思う。

行政だけでやっていくには限界がある中で、学校教育においても、先程お話があったような特別な支援が必要な子供が増えていく中、全ての先生方が対応できるスキルを持ち合わせているのかという問題もある。先生方も苦労しながら何とか自分たちの関わっている子供たちの未来のために努力をしている方もいる。

そういう中で、学校以外の地域等で、自分たちにも何かできることはないか、手伝いをするよ、という取組があり、さらに、地域の子供は地域で育てるという環境づくりの中で、多くの方が関わることにより、それぞれのスキルを持ち寄りながら良い方向へ解決していく、そんな地域社会ができればと改めて感じた。

沼津市においては、良い方向に向かっていると思うが、やはりまだまだ把握できていない部分をしっかり押さえながら、誰も取り残さない社会を築き上げていくことが大変重要だと思った。

#### (委員)

教育は人間づくりであるので、例えば30年、50年経った後に、どんな人間が日本に残っていて欲しいのか、という視点から教育はしていくものだと思う。今、日

本人は少子化でどんどん減少し、外国人がどんどん入ってきている。100年もしたら、日本人は日本にいないのではないか、そう考えるとすごく怖くなる。

そうならないためには、日本の歴史や文化を受け継いでいく子供たちを育てていく必要があると思っている。私は学生時代には英語や数学、国語などは実学系として必要だが、古文や漢文、日本史などは選択しない人にとってはあんまり意味がないと思っていた。しかし、実は、日本人を残していく、日本人の文化を脈々と受け継いでいくためには、古文や漢文、歴史は、非常に重要な学問だったと、今になって思う。

例えば、30年後、50年後の人と話をしたときに、「祇園精舎の鐘の声」には、「諸行無常の響き」があるという風に思わない人がいたり、「岩にしみ入る」と聞いても「蟬の声」と思いつかない人がいたりするかもしれないわけで、そういうことが通じない人たち、日本語を話すけれども、日本のことを何一つ受け継いでいない人たちが出てきてしまっているのかと思う。

これは私だけの考えであるが、人間はどんどん変わっていくわけだから、社会もそういう風に変わっていくのもある程度受け入れざるを得ないと思う。しかし、そうは言っても二千年の日本の文化を、脈々と繋いできていたものを、そういうところの教育を怠ったために、日本の文化というものが消えていってしまっているのかということ、時々考える。

ただ、あんまり先のことを考えてしまうと、極端な話をすれば50億年経てば太陽もなくなり、地球も消えてしまうので、そんな100年、200年先のことを考えてどうするかと思うこともあるが、それでも未来のことを考えると、日本文化を承継していくことが必要だと強く思う。

また、教育や学問って何のためにするのかというと、良い大学に入って就職して良い生活を送るためや、資格を取って収入を得るためという要素もあるかもしれないが、市民大学などあるように、様々なことを学ぶことは人生を豊かにするので、人生百年時代というが、同じ百年を生きるのだったら、実りのある豊かな人生を生きていきたいと思う。

そういった実りある人生を歩めるようにするための取っ掛かりとして教育があり、学びたいときに学べるものが提供されていることは、素晴らしいことではないかと思う。高尾山古墳もそうであるが、そこにあるものが一体何なのかを知ることによって得るものや感じることは違う。人生を豊かにするための教育は、常にあるべきだと思っている。

それから、子供たちや人間がどうやって生きていくか、何になるべきかを考えるときに、周りにいるフロントランナーのような存在は大きいと思っている。私の場合は、就職活動をしていても上手くいかず、このままどこか受かったところに就職して、そのまま20年、30年と勤め上げていくのは、何か変だと思っていたところに、世話になった弁護士と会い、その方の話をいろいろと聞いて、こういう風に生きていくほうが良いなと思って弁護士を目指し今に至っている。子供たちや後に続く人たちにとって「こうなりたい」と思ってもらえるような人間になるよう、私自身も努力していく必要があると思っている。子供の将来性や夢があるとかないとか、

暗い気持ちになるのは、大人が下を向いているからではないかと思う。そういった点ではやはり、大人たちが夢を持って良い人生を送っていくことも大切なことではないかと思う。

(市長)

国際化という言葉があるが、よく指摘されるように外国と迎合することが国際化ではない。先程、アイデンティティの話にも出てきたが、日本人とは何であるのかということが確立され、その上で諸外国と付き合う、これが国際化だと思う。

そういう観点からいくと、日本人が大事にしなければならない精神文化や文化芸術、それらをしっかりとおさえておくことは大切で、また、幼少期から日本の文化に触れたり、体験することも必要である。これからさらに国際化が進んでいく中で、日本文化のアイデンティティをしっかりと認識していくためには、教育の中にも取り入れていくことも重要だと思った。

沼津市においては、郷土の先人として江原素六先生がおり、江原先生の地域に対する貢献について、例えば、金岡エリアでは江原素六先生の足跡を勉強することを小学校4年生で行い、地域の皆様が一緒になって行動し、現場を見て語り合う、そんな体験をする中で、地域の歴史を知っていく。教育の中でこのようなことをやっていくのも大切だと思う。

また、フロントランナーとして大人を見せようという話もあったが、例えば、沼津商工会議所の青年部には、職業体験ができるような学びの場を提供していただき、子供たちと語り合ったり、自分の仕事について熱い思いを持って語ったりする、そのような機会を設けていただいている。子供たちにも、沼津市にはこんな企業がある、こんなに熱い思いをもった人たちがいると、地域に対して目を向けるきっかけとなる取り組みである。学校も現場も大事であるが、周りしっかりと連携することも大切だと思った。いずれにしても大変重要な視点であったと思うので、委員からの御意見に感謝申し上げます。

(委員)

ますます少子化が進んでいくため、これからも学校規模・学校配置の適正化については継続していかなければならない課題の一つだと思う。非常に難しい問題が多いが、子供たちのためのより良い環境づくりはとても大切である。

少子化が進んでいる中で、特別支援学級に在籍する児童生徒数が増えていることや、不登校の児童生徒数の増加についても、大きな課題である。不登校の児童生徒の居場所づくりなどの取組は行われているが、本来の学級に戻れる環境づくりが大切である。これは学校現場だけでは解決できる問題ではなく、各家庭との連絡を密にして、児童生徒の精神的な問題の解決に取り組んでいかなければならないと思う。

一方、教職員の先生方においても、長時間勤務の負担の負担となっているのがかなり大きいと聞く。授業などの日常業務に加えて保護者対応等もかなり多いと聞く。それによって、体調不良をきたして退職や休職になってしまうなど、教育現場にとって大きな損失であり、児童生徒たちにとっても不幸なことである。

数日前に NHK の静岡県の地方ニュースで、愛鷹小学校の給食の時間が放送されていた。沼津の地域産業であるお茶を使ったお茶ご飯が、市内の全小中学校の給食で提供されたことが報道されていた。すごく嬉しそうな子供たちの顔が映し出されたのを見て、こちらも嬉しくなり、全ての子供たちにこういう笑顔を持ち続けてほしいと思った。これからも、沼津の子供たちが郷土愛を育むような取り組みや行事などが続けられるとよいと思う。

(市長)

子供の幸せな姿を見ることほど、嬉しいことはない。私はそのニュースを見ることができなかったが、沼津市は優れた地域の特産品があるということで、学校給食に活用し地産地消や食育などを進めている。その一環としてのお茶ごはんの学校給食の提供のニュースであったと思う。

沼津でどんなものが生産されているのか、こういうことを知らないで成長していくことは本当にもったいないことだと思う。そういう点では、学校給食に地域の優れた食材をどんどん活用していただく、これは子供にとっても大人にとっても幸せなことに繋がるということと、地域の産業を支えていくことに繋がると考えている。

(教育長)

市内の小中学校を訪問する人事管理訪問が始まったが、子供たちと先生方とのやり取りや、子供たちの満面の笑みを見て、元気をもたらしている。学校現場では、先生方は大変であるが、子供たちのこの笑顔のため日々頑張っている姿を、私も応援したいと思っている。

最近歳のせいか、一年一年が過ぎるのを非常に早く感じている。時代の変化が早い、そうすると遅れをとってはならないと、出されている情報などに振り回されがちになる。予測が困難であっても、物事を冷静に見極める、本質を見失ってはいけないと、自分に言い聞かせている。ややもすると、よかれと思った手段が目的化してしまうことも多々ある。

これまでもそして現在も、様々な分野で流行やブームはある。それらの多くは、やがて姿を消していく。しかし、音楽や文学作品を例に挙げると「不朽の名作」というものがある。次から次へと新しいものが誕生する中で、時間が経っても愛され続け、その価値が変わらないものには、しっかりとした理由がある。表面的な情報にとらわれず、物事の根本的な原因や真の価値を理解する力を身に付けたい。

委員もおっしゃっていたが、日本らしさや文化、伝統、芸術など、大人が関心をもっていなければ、子供にはなかなか伝わらない。大切なことを次世代へと引き継いでいくのは、大人の大切な責務だと思う。そのためには、多くの委員がおっしゃっていたように、「体験活動」を重視し、発達段階に応じて公的機関はもちろん、民間企業等と連携しながら育むことが重要である。まさに「地域総がかりの教育」に繋がる。教育 DX の発達により、多様な学びの場は増えてきたが、仲間と汗を流して、達成した時の喜びなどは、教育 DX では体感できないことで、とても重要なことだと思う。昨年の総合教育会議でも申し上げたが、「リアルとデジタル」の両者をバ

ランスよく活用していくことが大切である。

本日、傍聴席には校長先生方にも御出席いただいているが、校長は子供の命を守るということを最優先にして、安全・安心な学校づくりを進めている。安全・安心、それから先生方の健康、そしてその御家族の幸せ、こういうものを大切することを追求しながら、学校経営に力を注いでいただいている。

気候変動に伴い、防災教育の大切さについては、今後さらにクローズアップされていくと思う。大地震による災害もちろんであるが、異常気象による天気や気候の変化で、日本でも山火事や大雪、熊の出現の多発化など、今まで見られなかったような災害や、目を疑うような大型台風やゲリラ豪雨など激甚化する災害が多発している。

私たち大人が今までの災害に対する心構えや危機意識を変えて、行動しなければいけない。これまでの常識が通じないということ、安全・安心の在り方が変わっていくことは、注視すべきことである。自分の命は自分で守る「自助」の意識と、高齢者や身体的弱者等と共に生活する中で、子供たちの思考力・判断力・行動力は、「共助」には欠かせない。

校長先生方には、今年も防災管理の見直しと防災教育の推進をお願いしたところである。学校管理下であっても、子供たちの災害からの安全を考えるのは決して学校だけでよいわけではなく、保護者や地域の関係者や関係機関との連携・協働が求められる。学校の子供たちは地域の子供たちである。学校と家庭・地域との連携・協働は必然である。

本市においては、既に全ての中学校区をコミュニティ・スクールに指定し、学校運営協議会を設置している。学校運営協議会が、学校の重点取り組みの柱として防災教育を位置づけていくことは、校長が人事異動しても、永年にわたりその取り組みが継続・発展していくと考える。継続した取り組みは、活動しながら地域の次世代の担い手を育てていく。避難訓練を運営するアシスタントとして高校生が中学生を、中学生が小学生を教えていく光景も期待できる。

今後、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動の仕組みを活用して、学校の安全に対する取り組みを進めていくことは、地域や関係機関との連携強化にも有効だと考える。このことは、平成 24 年に国の教育振興基本計画に示された「自助・公助」の理念のもと、わが国独自の学校安全の考え方を基盤とする包括的な安全推進に取り組む「セーフティプロモーションスクール」に繋がると思う。

これからの地域防災訓練では、避難所運営のシミュレーションは必須であり、ここでの高校生、中学生の活躍は、地域としても大いに期待するところである。特に避難所運営や避難所生活が長期化すればするほど、心身は疲弊し、ストレスが高まるゆえ、人間関係調整力や課題解決能力が求められる。

どのような時代であっても、「なりたい自分になる」、これに向けて「貴き志と探究心」を持つこと、仲間と協働し、困難を乗り越えようと挑戦する「たくましさ」と「しなやかさ」を持って心豊かに生きていくこと、このことは不易だと思う。そのことが、未来を担う子供たちの「ウェルビーイング」の向上につながり、やがては家庭や地域、社会に「ウェルビーイング」が広がっていくものと信じている。

(市長)

不易について、冒頭でもお話をさせていただいたが、変えてはならないものということである。5月23日から27日まで、中国の湖南省岳陽市を訪問した。岳陽市は、沼津市と友好都市提携を結んで今年で40周年を迎えた。その記念式典に出席するために伺ったところである。

この友好都市関係を結ぶ経緯・経過については、1979年に中国の方から「中日友好の船」というのがあり、こちらの岳陽市の会の皆様方が沼津市を訪れていたこと、翌1980年には沼津市にゆかりのある福地愛子さんという女性が、沼津市に帰国されていた。そんな御縁もあり、その後も様々な視察や手紙のやり取りを重ねた結果、沼津市と岳陽市が友好都市提携を結ぶのによいのではないかという流れになり、都市提携が結ばれることになった。

友好都市提携を結ぶきっかけとなった福地愛子さん御自身は、今年100歳になり、現在もお元気で生活されている。中国の皆さんからは、岳陽市と沼津市の関係を築いた方ということで、本当に大切にされていた。中国の故事であるが、「井戸を掘った人のことを忘れてはいけない」ということを、しっかりと実践され、福地さんを大切にしていた。福地さんともいろいろお話をさせていただいたが、感謝に堪えない、いろんなことをケアしていただいているとのことだった。

我々が行って驚いたことの 하나가、40年前だったら岳陽市もまだまだ発展途中だったと思うが、高層ビルがどんどん乱立しているような状況で、人口も570万人となっていた。このような大都市と友好提携都市を結んでいることはすごいことだと改めて感じた。

このように、時代が流れて社会が変わっていく中であっても、人と人とのつながりや絆は不変のものであり、「不易」なものである。沼津市と岳陽市の友好都市提携も、人と人とのつながりや縁をきっかけにして始まった。そのつながりから、また新たなつながりや縁が生まれて続いていく。このような「人との結びつきや縁」は、社会がどんなに変化しても大切なものであって、そういう「心」を育てることは、大切にしていきたい「不易」の部分であると思う。今回の岳陽市の訪問を通じて、そのようなことを感じた。

以上で、予定していた会議日程をすべて終了した。皆様方からは、大変貴重な御意見を賜ったところである。次期沼津市教育大綱の策定については、冒頭にお話させていただいたように、「貴き志を持つ人づくり」を実現していくという骨子は変えずに、新たな時代の潮流に合わせた要素を加えていく。本日、テーマとして挙げた「探究心」や「誰一人取り残さない社会」、「ウェルビーイング」について、皆様方からいただいた大変貴重な御意見を踏まえ、時代の変化に合わせたアップデートを図っていききたいと考えている。

また、未来を見据えた人づくりに向け、教育委員会と市長部局が一体となり、一層の連携を強固なものにさせていただき、これを基軸に教育大綱の策定を進めていきたい。御理解と御協力を賜りたい。本日は、教育長と教育委員の皆様方の貴重な

御意見を頂戴することができた。心から感謝申し上げます。

## 5 閉会